

◎「能勢の妙見さん と呼んでいたが どうも 妙見山 らしい」過去に2.3度行った覚えがあるようなないような山である。資料によると、北極星の神様を祀る。芸能文化人がお参りする。

日蓮宗：何無妙法蓮華教（法華級の教え）である。

◎高校の講演会で知り合った美香さん、住まいが兵庫県川西市：日生中央なので、「近所で 紅葉を 妙見口集合 歩きましょう」ということで、電車でやって来た。止々呂美や光風台は車で毎月絵の配達に来るが、電車は久しぶりに乗った。元来“能勢電鉄妙見線”という名前だったが、日生中央駅に乗り取られ、妙見口に行くには山下という駅で乗り換えということになっている。運転席の後ろから見てみると、単線のレールが曲がりくねり小さいトンネルに入ると真っ暗、電車は近代的な車両だが昔の雰囲気レールのレールであった。

◎最初、「山下駅で会おう そこから車で」ということで、「山下駅？どこかな」と調べた。「あれれ ここ知ってる 磯部さんの家・・・」グーグルマップで調べると、亡くなった彼の住まいがまだあり写真が載っている。彼とは最初にあつてすぐ山の話になり、「連れて行って」ということで、滋賀の比良や奈良の三嶺へ5.6回同道した。スキーができるので冬山は平気だった。

◎帰って登った山の地図を見ると、妙見口駅よりぐると反時計に大回りしていた、コースタイムで5時間ぐらゐのコース、なだらかな斜面を少し登り少し下りの山の姿である。ほとんどが樹林帯、照葉樹帯もあるが針葉樹の植林が多い。前回登った中山より武田尾コースよりやや短い。山のデコボコもやや小ぶり、近所の里山歩きの山であった。針葉樹林帯の山は薄暗く今の季節はやや涼しい、肌寒い、空は青くぼんやりお陽さんが見える。なだらかなポコリンの所をせっせと歩いている。

◎山の中に看板があり、池田炭とクヌギの樹の景観を見せている。“台場クヌギ林”クヌギの樹の下の方から何年かに一回伐り、何年か経つと切られた幹からまた幾本か生え延びそれを伐る、というのを繰り返した樹々のことらしい。

ネットでは池田炭は高級品で茶の湯などに使用された。生産地は猪名川の上流部の山間、まさにこのあたりが炭焼きの窯がいくつもあったのだろう。炭は銀山の窯でも使われたらしい。焼かれ炭の集荷地が池田だったのでその名がついたとか。ミツマタの群生地もあるそうだが、このあたりの和紙に関する情報は見えない。3月には見事な花が咲くそうで、見物客で賑わうらしい。

◎田中裕明：ひろあき：「知ってる？」と聞かれ知らなかった。北野から京大、村田製作所という経歴の有名俳優らしい。1959年生まれ45歳で亡くなっている。なかなか渋い句だ。

麦を刈る ほとりに座り 伊勢の山

◎てっぺんに上がったところがちょうど昼過ぎ、「さあ ごはんを食べよう」「いつもここで食べます」「今日は屋根の下で」そこに人がおられ、美香さんが旧知の中のように話しかけられる。「コーヒーどうぞ」「歳が歳なので 一緒にしてくれる人が ないので ひとりで 登ってます」山の話が盛り上がり飯のあといっしょに降りることになった。

◎廃寺の話になり“応仁の乱”に及んだ。1467年から10年間京都を中心に戦乱があった。室町幕府8代将軍足利義政の後継者争い、守護大名間の対立等で全国的な規模に発展した。東軍の管領細川勝元と、西軍の山名宗全が戦った。東軍の細川側が勝利したが、内乱で疲弊してそのまま戦国時代に入って行く。

応仁の乱のときに、寺院への打ち壊しが続き、「寺は神社に变身」というのが多かった、と力説される。

向かいの山のとてっぺんに 寺の廃屋があるというが、時代はわからずじまい。近所の剣尾山にも廃寺跡があった。この跡は石垣があり、井戸や礎石の跡がありなかなか立派な寺院が在ったと思われる。

◎「野呑みをしましょう」と予定していた。三人でケーブル駅付近からちょっと上に上がっていくと、モミジ葉の赤色がキラキラ光る雰囲気の良い場所に出た。「ここが 紅葉の名所ですねん」このあたりをよく知る彼が案内してくれた。ワイン、チーズ、おかきなどを取りだし1時間ほどゆっくり楽しんだ。家に帰り着いたのは5時頃だった。続けて2回宝塚線に乗るとは不思議な縁である。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎古事記には、序文が付いている。ここに有名な“太の安萬侶”“稗田の阿禮”の名が出てくる。

◎臣安萬侶言 夫混沌既凝 氣象未効 無名無為誰知其形然乾坤初分參神作造化之首

やつかれ やすまろ まをす それ まじりし はじめ すでに こりかたち あらわさず ななく
わざなく だれか そのかたちを しらむ しかるに あめつち はじめて わかれ さんしん ぞうけ
はじめと なす

氣象：かたち 無為：わざなく 乾坤：あめつち 參神造化：さんしんぞうけ 作首：はじめとなす

◎臣下、安萬侶が申し上げます。

そもそも、混沌とした大元はすでに凝り固まりながら、生命の兆しはいまだ顕れていない。名もなく、目に見える動きもないままでは、誰か、その形を認識することなどできたであろうか。しかしながらついに、天と地が初めて別れ、三柱の神が、万物創世の先駆けとして姿を見せた。<中略>

まこと、始原の時は杳として明らかではないが、古くから伝えられた教えにより、国土を孕み島を生み成した時のありさまを知り、根源の時は遥かに遠く極めがたいが、今は亡き聖たち教えに頼り、神を生み人を立てた世のさまを知ることができるのである。<中略>

ここに大海人天皇は次のごとく仰せになった。：古事記には無かった“天皇”という単語が出てくる！

朕が聞いていることは、諸々の家に持ち伝えている帝紀と本辞とは、その真実の内容とは違い、多くの虚偽を加えているという。今、この時にその誤りを改めない限り、何年も経たないうちに、その本来の意図は減び去ってしまうであろう。これらの伝えは、すなわち我が朝廷の縦糸と横糸とをなす大切な教えであり、人々を正しく導いてゆくための揺るぎない基盤となるものである。そこで、よくよく思いめぐらして、帝紀を撰び録し、旧辞を探し求めて、偽りを削り真実を定めて後の世に伝えようと思う。<中略>

ちょうどその時、天皇の側に仕える一人の舎人がいた。氏は稗田、名は阿礼、歳は二十八歳であった。その人となりは聡明で、目に見たものは即座に言葉に置き換えることができ、耳に触れた言葉は心の中にしっかりと覚え込んで忘れることがなかった。すぐさま天皇は阿礼に命じて、自ら撰び定めた歴代天皇の日嗣のつたえと、過ぎし代の出来事を伝える旧辞とを誦み習わせたのである。<中略>

ここに、名高き皇帝陛下は、旧辞が誤り違っているのを惜しみ、先紀が誤り乱れているのを正そうとして、和銅四年九月十八日、臣下、安萬侶に詔りして、稗田の阿礼が誦めるところの、飛鳥の清原（きよみはら）の大宮に座した天皇の勅語の旧辞を撰び録して献上せよ。と仰せになったので、謹んで詔のまま隅々まで細やかに採り拾った。

しかしながら、遥か上古の時代は、言葉も意味も共に朴直であり、文字面を整え句を構成するに際して、渡来の文字を用いて書き記すの困難を伴うことであった。全ての言葉を唐の文章によって叙述したのでは、記された言葉が上古の心に及ばない。また逆に、すべての言葉を音を生かしながら書き連ねたのでは、文字の数があまりに多くて伝えたい趣旨が間延びしてわかりづらい。そこでこの度は、わかりづらい場合には、短い一句の中にあっても、大和の音と唐の訓とを交え用い、わかりやすい場合には、ひとつの出来事を語りきるほどに長い叙述であったも、すべて唐の文章を用いて記録した。

◎「箕面を歩きたい」と聞くと、「え みのお そんな 箕面なんて 小学校の遠足で・・・」そんな風にぼやきながらも、地図を見てみた。「箕面から池田まで」300メートルぐらいの低山が連なる。先日来、中山から武田尾、妙見山一周と低山が続いている。もっとも武田尾の場合は6時間ぐらい、妙見も5時間ぐらい時間をかけて歩いた。箕面池田間も5時間ぐらいだった。

◎箕面駅に7時半に着いた。十三駅と石橋駅で二回乗り換え1時間もかかる。八尾に行くにも1時間かかる。電車での移動は、乗り換えが2度3度続くと1時間以上時間がかかるようだ。写真家の中西さんちで、一杯飲もうと桜井駅から歩いたことが何度かあったが、それもまた懐かしい。

◎駅から歩きだした。同道はひろみ・難波のお二人である。前日地図を見て、「いりくんだ駅前 どう行けば・・・」と思案していたが、歩きだすと、「おお 子どものころから歩いた道 箕面の滝へ 行く道だ 昆虫館もある」といろいろ思い出してきた。川沿いの道、観光客相手の土産もん屋、立派なお寺、きれいなトイレがいくつもある。“五月山”と書かれた標識があるトンネル、「ここを歩きますが 滝を見ますか」とまず滝まで歩き、引き返してトンネルをくぐった。「あれれ この道じゃない・・・」「滝の方まで引き返し」滝までの途中に階段があり、「ここ ここを登っていく」階段を上ると道がある、そこをせっせと登っていく、「続くねえ」と上を見上げながら高度を稼ぐ。

◎地図を調べていったが、「都会周辺の低山は 道がいっぱい」という通り道がいくつもある、いちいち標識はない。箕面山というピークがあり、「六個山を目指して」と歩くうちに横がゴルフ場に出た。今回もそうだが都会周辺の低山には、ゴルフ場が多い、今回も二つあった。その横をフェンス越しに芝生を見ながら歩くのも気がそがれる。先日も箕面：止々呂美に絵の配達帰りの帰り、ちょっと散策しようと“高山：高山右近の生地”の公民館に車を止めいつもの段々畑を登っていった。「ちょい上まで 行ってみるか」と登り峠に行き着くとフェンスがありゴルフ場だった。ゴルフ場の下の方の田んぼの米は薬で汚染されて喰えないね、なんて悪態をつきながら帰った。

◎この山は標高300Mぐらいの上り下り、針葉樹林帯が多くその隙間に照葉樹もあるという雰囲気、景色はまるで見えない、空は青い、風は冷たくシャツ3枚でちょうどいい。六個山（ろっこやま）を目指して歩いている。その直下は土の急斜面、これが泥になると歩きづらいねと、エンヤコラである。

◎「ちょっと早いけど 昼ごはんにしましょうか」机のあるベンチで弁当を広げた。「この先が 未知の道 五月山から 池田駅に抜きたい」向こうの方に広々した台地、その台地にポコポコ赤く色づいた樹が何本も見える、「なんだか遊園地のような」そちらに向かって進んだがその美しく見えた景色はゴルフ場だった。今日は二つのゴルフ場のへりを歩いたことになる。大きな霊園があり、そこを抜けると五月山地区に出たが、未知の世界、どう行けば森の中を抜けて駅に出るのかわからない。結局どんどん下って、駅と離れたところに出てしまった。あとは車道を歩き、池田駅まで歩いたが、その道中、石の彫刻がいくつもある。池田市は石の彫刻が華々しく展開するなかなかの街であると実感。

◎早いので梅田に出て、山道具店を見ませんか、ということで梅田まで行き、駅前第二ビルに行った。先日第四ビルの2階に上がると“ロッジ”が無くなっている。「あれれ」と思っていたが、“石井スポーツ”の跡に新たなロッジがあるという。今の靴、シリオの登山靴、3万円弱で京都ロッジで買った。山田さんに付き合ってもらい5.6年前に買ったが、「最近 滑る 渡渉がこわい 歳だねえ」と体力不足を嘆いていた。靴の底を見て、「あれれ すり減っているじゃないの」と愕然とした。「コレ もう最後の靴だと思っていたのに」である。次の靴を探さねばと思っていた矢先なので、「靴の底を張り替えて それまでのつなぎ 安い靴を買わねば」と思っていた。ロッジの人が言うには、「張替は 2万4千円です」「え 昔は 1万ちょっと・・・」てなことで、27500円の新品を買う羽目になった。「とほほ うれし」

◎「ちょい飲もう」と地下の飲み屋街に、3時なのに人がいっぱい入っている居酒屋に入った。ビールが200円、アテも安い、3杯も飲んで上機嫌、美味しい物も喰って帰った。

◎竜神スカイラインを走っている、所々で道路が凍結している、谷元さんのマツダ車、スタッドレスタイヤ装備なので滑りはしない。昨日の天気予報で山間部は積雪と出ていた。ベテランの5人と同行なので軽い雪装備は万全のようだ。オレも昨日の山の写真を見て、「今日の登山は 軽アイゼンぐらい 要るかも 電車で久宝寺までなので ピッケルは おおげさかな」と、ストック一本ザックに入れた。

◎伯母子岳は20年ぐらい前に澤山さんと二人で行った覚えがある。「なんだ 簡単な山だ しょうもない山だな」なんて印象しかなかった、村の中から登ったような記憶。山の名は、村の長者が美貌の乳母に子育てをたのんだのが由来らしい。美貌というからには、乳飲み子とパパも一緒にお世話になったのかもね。

◎道の駅：護摩さんスカイタワーは閉まっていたがトイレを借りて奥千丈林道登山口まで進んだ。このあたりの竜神スカイラインは標高が1300Mで雪が凍結している。登山口までの30分の細い道には、車の轍：わだちはある、「ひょっとしたら 入っているヒト いるかも」と進んだ。駐車場はないので道端に駐車した。外気は寒い、今にも降りそうな暗い空、道路は凍っているところもある。お二人がチェーンアイゼンを着けた。10センチぐらいの積雪と思ったので、スパッツを持ってない、雨具のズボンを履くのは嫌だし・・・と出発したが、下山した時には靴の中に雪が入り、ズボンの裾は雪が絡みつき、冷たい思いをして帰った。

◎1時間ほど歩いた。陽が軽く照りだしたりまた曇ったり、樹々の枝に着いた霧氷がキラキラ光る、風は冷たく上衣のジャンパーは脱げない、毛糸の帽子の上にフードまで被っている。それでもだんだん温かくなってきた、フードを脱ごうかと思案しながらも帽子とネックウォーマーは着けたままである。樹々の影が白い雪にずらずら並ぶ、思いがけない雪山登山に感激である。

◎10センチぐらいの雪だけど、30センチの深みにはまり込む、「くそお 靴に雪が入り込む 靴の中が濡れる 帰るまで我慢かな」ズボ足の靴底と雪がすれる音、きしるような音、キュッキュ、下が土なのか石なのか枯葉なのか、キュッキュ。

◎前日、地図を見て、「だらだらした山 楽ちんな山」と思っていた。登山口が1200M、次のピークが1300M、伯母子岳が1344M、軽い上り下りのポコリン山、歩いて思ったが、「軽トラぐらいなら 通れるのでは」という巾広の登山道が続く。雪は深いところで50センチぐらいになり、登山靴に雪が入る、「あチャチャ スパッツを忘れたこと 大反省」である。高所恐怖症とはいえ、いちおう山のベテランなのに、間抜けなことを、「スパッツとは、雪も、雨も、雨上がりも、泥んこも、要るんだぜ」

◎1：15 伯母子岳山頂到着。100M ぐらいの上り下りのなだらかな山だけれど、雪が付いていると時間がかかってしまう、「早く帰らないと 日が暮れる 4時半には 車のところに 着きたい 遅い弁当は風のゆるい 下の方で 食べましょう」コースタイムは登り2時間半、降り2時間20分、となっている。登りは1時間多くかかった。ちょっと風がないところで腰を下ろして弁当を食った。まわりは雪でザックの上に腰掛けた。この寒さ、冷たい弁当は喉が通りにくい。カップヌードルも考えたが、ここまで冬山になっているとは思っていなかった。冬山の弁当は、立ったままでそそくさである。

◎2時、3時になって陽が照りだし、空が青くなってきた。傾いた太陽が山を赤く染める、枝えだの霧氷が風で飛ばされ、キラキラ光る。飛び散った雪片が往路で歩いた我々の靴跡に飛び散って、白いかけらが、お菓子のよう、料理教室のように、撒かれている。

◎ネットの案内で、「展望がきき、きれいは風景である」と出ていたが、お陽さんが出て晴れてくると、このあたりはなかなか壮大な景色に見えてくる。ここは和歌山県なのかと思いきや、竜神スカイラインが県境のようで、伯母子岳は奈良県にあるようだ。繰り返すが景色は素晴らしい、山々がボコボコ連なる、陽があたる斜面、陰の斜面、地球うねりが伝わってくる。

◎到着は4時半ごろかと思っていたが、横に道路が見え4時に車のところに帰りついた。今季初の雪山、感激である。ここは距離が家から遠い、久宝寺までが1時間強、久宝寺から車で2時間半往復8時間の交通時間だった。山は10時出発4時到着で6時間。交通時間の方が長い伯母子岳でした。

◎俊平入道弟習算術語 24-22 としひらの にふだう の おとうと さんのずつを ならふ こと

◎算術：加法：足し算 減法：引き算 乗法：掛け算 除去：割り算 四則演算というらしい。

高校生時代には数学は好きな科目だったが、今ネットで見るとまるでちんぷんかんぷん。素数、因数、微積分、まったくわからないのには困ったことだ。当時、「数学は 問題を見ると なにかが閃いて スイの スイの スイ で 式ができ上がった 感性だねえ 数学は」なんて思っていた。その感性が消えると、何もかもが消え去ったようである。ひょっとしたら、絵を描くオレも、感性が消滅すると、絵がまったくわからなくなるのかもしれない。絵がまったくわからなくなる自分を想像するだけでも恐ろしい。

◎平安時代は算道と呼ばれ、中国古来の教科書が用いられた。算術算道を収めたものは実務に従事していた。貴族の子ども達は、九九は平気で言えた。

◎算術：さんのずつ：算道：この術を占いや呪術あつかいするのは抜きにして、平安時代に算数というものが何に必要なだったか考えてみた。

十一の数字、加減乗除、面積体積の計算、粳と玄米の換算、ピタゴラスの定理、ぐらいであつたらしい。平安時代の下級役人が、算数を駆使して、いろいろ計算していたはず、ものの流れの基本だものね。上流階級は、権力や色恋に右往左往している、下級役人も、計算しつつちょっとごまかし賄賂をもらい“ポッポ内々”があつた。「オレは そんな不正はしない うそつけ」である。

◎今昔のこの本の中で、算術は計算だけでなく、占いや呪術の要素が出てくる。陰陽道同様の話が出てくる。当時の中国文化ではそういうことだったのかもしれない。この話は、今はこれぐらいで。

◎今は昔、高級役人の弟、〇〇がいた。＜中略＞

この男、殿の供をして九州に下っている時、近く渡来した唐人で、算道の名人がいた。〇〇がその唐人に、「算道の置き方を習いたい」と申し入れると、唐人は初めは相手にもせず、ぜんぜん教えようとしなかったが、ためしに算を置かせてみて、「おまえさんは算の達人になる素質が十分にある、だが、日本にいてはうだつが上がらないよ、日本は産道ではだめな所ようだ。だからお前さんがわしと一緒に宋に渡ると約束するなら、すぐに教えてあげる」

〇〇は宋に渡ることを唐人に固く約束した。＜中略＞

唐人はさらに、「この算の術には、病人を置いて直す術もある、また、病気でない者でも、癩に障る奴だとか憎い奴だと思ふ者を、算を置いてたちどころに殺す術もある。どんなことでもこの算の術でできないことはないのだ。だから、こういうことをすべて少しも惜しみ隠さず、みなお前さんに教えてあげよう」

「わしと一緒に宋に渡ると誓いなさい 人を殺す術は 船の中で教えよう」＜中略＞

〇〇は唐人との約束を違え、宋に渡らなかった。唐人は怒って、〇〇を呪い術をかけた。〇〇は以後呆けてしまった。

うにさか◎ある夜、女房たちが大勢集まり、夜更かしの庚申待ちをしていた。眠気が差してきた女房たちが、「〇〇さん皆が吹き出しそうな面白い話をしてくださいな」という。

〇〇は、算木をパラパラとだす。これを見た女房達は、「これがおかしいことなの では笑いましょう」と言って冷やかすが、〇〇は、返事もせず算木をさらさらと置いた。置き終わり、そこにある巾七、八分ほどの算木を捧げ持ち「さて皆さん それならばお笑いになりませんか では笑わせてさしあげましょう」＜中略＞そのあと女房たちは笑いに笑ってどうにも止まらないという状態になった。

◎庚申待ち：中国起源の行事：さるわたりの日に徹夜をして神仏を祀る。寝てはいけない一晩。日本に来て、いろんな神様になり、近代では 60 日に一度のこの日、眠らず長寿を願うという信仰が続いていた。

寸白任信濃守解失語 すんぱく しなののかみに むじて とけうすること 26-39

◎寸白：サナダムシ：形状が真田紐に似ているから：

◎胡桃がサナダムシの特効薬というが、ネットを検索しても出てこない。当時の今昔氏のころの噂話かも。

◎藤田絃一郎：先生は回虫の専門家で、腹にサナダムシを飼っているとか。「寄生虫、ばい菌、ウイルス、みんな悪い、これは違う」と先生は言う。微生物の世界ではみな縄張りがある。宿主である人の中に住む微生物は快適に暮らしていくために人を殺したりしない。エボラ出血熱ウイルスは緑猿が宿主で、人に移ると恐ろしいウイルスになる。鳥インフルエンザウイルスはカモが宿主で、鶏に移ると鶏を全滅させてしまう。

◎物語は、サナダムシが人に化け、朝廷の高官となって地方：長野県；胡桃の産地：赴任してゆく。狐が人に化ける話があるのだから、まんざら奇異ではないが、不思議な物語りである。

◎今は昔、腹の中に寸白を持った女がいた。〇〇の〇〇という人の妻となり、男の子を生んだ。次第の成長し、元服など済んだのち官途につき、ついに信濃の守になった。

さて、はじめてその任国に下った時、国境で歓迎の饗宴が催された。守がその宴席に着くと、多くの郎等も着座した。国の者共も多く集まっていたが、守が宴席について見渡すと、守の前の机をはじめ末席の机にいたるまで、すべて胡桃一式で様々に調理した食物で盛ってある。守はこれを見て、どうしようもなくつらい思いがして、ひたすら体の水分が搾り取られるようにもだえ苦しんだ。そして苦しいあまり、「なに故この宴席にかくも胡桃を多く盛ったのであるか いかなる訳じゃ」と問いただすと、国の者が、「この国にはいたる所に胡桃に木が多く生えております されば 守殿の御着にも また御館の上下の方々にも すべてこの胡桃を様々に調理して お出ししたのでございます」

このように穴〇〇まどい、弱り切った様子を、その国の介で、年老いて万事に通じ、世故にたけた男が見て、不思議に思い、あれこれ思いめぐらし、「もしやこの守は 寸白が人に生まれ変わり この国の守となって赴任したのではあるまいか あの様子を見ると どうにも不審でならぬ ひとつ試してみよう」と思いつき、古い酒に胡桃を濃くすり入れてひさげに入れ、熱く沸かして国の者に持たせ、自分は杯を折敷に載せて目の上に奉げ、うやうやしく守の御前に持って行った。すると、守が杯を取ったので、介はひさげを取り上げ、守の持った杯に酒をつぐ。酒には胡桃が濃くすり込んであるので、酒の色は白く濁っている。守はこれを見て、ひどく不興気な面持ちで、「酒をやたらいっぱい注いだな この酒の色は普通と違い 白く濁っているのはどういうわけだ」と尋ねる。

介は、「この国では昔から習慣といたしまして 守の御赴任の折の御出迎いの宴では 三年以上たった古い酒に胡桃を濃くすり入れ 国府の役人がお銚子をもって守の御前に参りお酌をいたしますと 守がそのお酒をお召しになるのが定例になっております」ともっともらしく答えた。

これを聞くと同時に、守の顔は見る見る真っ青になり、ガタガタ震え出した。だが、守が、「これをおあがりになるのが定めでございます」と責め立てるので、守は震え震え杯を引き寄せたかと思うと、「わしは 実は寸白男だ もう我慢できぬ」と言い、サッと水になって流れ失せてしまった。そして遺体さえ留めなかった。

◎24 巻 7 に寸白の老婆の話がある。

下賤のモノとも見えぬ女が、粗末な袴を着け、藍色の練り絹に水を含んだような顔をして、身体じゅう腫れた姿で下女に手を引かれやって来た。「私はこんなに腫れてから 五六年経ちます」診察した医師が、「きつとサナダムシと思う」という。「その治療は」

〇〇を抜くにつれ、白い冷や麦のようなものが出てきて、それを取って引くと、ズルズル伸びて長々と出てきた。次第に女の顔色がよくなり、普通の顔色になった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎久しぶりに古事記を引っ張り出してきた。「さあ どこを読むか」「そらあ おおくにぬし」ということでパラパラ、読み始める。

◎さて、そのアマテラスのいい直しの言の葉など心につけず、スサノヲの悪しき振る舞いは止むどころか、なおの事ひどくなっていくのじゃ。

ある時、アマテラスが忌服屋（いみはたや：神聖な機織り小屋）に入って、機織り女たちに神御衣（かんみそ：神に奉げる着物）を織らせておった時に、スサノヲは、その服屋（はたや）の頂（むね）に穴を開け、天の班馬（ふちうま）を逆剥ぎ（獣の皮を尻の方から剥ぐこと）に剥いだ、そのまだら馬の皮を、穴から墮とし入れたのじゃ。ひどいことをする。

それで、布を織っていた天の機織り女のひとりが、落ちてきた皮を頭からかぶってのお、あまりの驚きと恐れで、機から転げ墮ちてしもうて、手から放り出した梭でもって、おのれの秀処を突き刺して、そのまま死んでしもうた。

それを目のあたりにしたアマテラスは、もう、言の葉で言い直すことができぬと思ったのじゃろうか、怯えてしもうて、天の岩屋の戸を開いて中に入ると、しかと戸を閉ざして籠ってしまったのじゃった。

◎さあ、アマテラスが籠ってしまったので、高天が原は隅々まで真っ暗になってしまっ、葦原の中つ国もことごとく闇に覆われてしまった。

そのため上の国も下の国も、常世が続くことになった。それと共に、すべての悪しき神々の音（こえ）は、五月蠅（さばえ）のごとくに、隅々まで満ち溢れ、あらゆる恐ろしいものの禍がことごとくに起こり広がったのじゃ。

◎アマテラス：イザナキがイザナミの居る黄泉の国から生還し、黄泉の穢れを洗い流した際、左目を洗った時に生まれたのがアマテラス。右目はツクヨミ。鼻から生まれたのがスサノヲ。

アマテラスは、皇室の祖神。太陽神。

◎スサノヲ：暴風の神、厄払いの神。荒々しい乱行により、天上界から追放されるが、ヤマタノオロチ退治から始まり、オオクニヌシに繋がっていく。

出雲風土記の中にスサノヲのことが書かれているらしい。出雲一帯で広く信仰されていた神らしい。

当時、朝鮮半島は日本から見て先進国、朝鮮半島から来た文化人、渡来人に対する信仰かとも言われる。

製鉄の神とも言われる。

◎出雲風土記：スサノヲのことは短く4か所に出てくるだけ。安来：スサノヲはここに来ると心が落ち着くといった。須佐：ここはよい所なので名をスサにしよう。佐世：させの木の葉を刺して踊った。御室：御室を作った。

ところがスサノヲの御子神は七神登場し、剣や矛と言った武器に係わる武神のイメージを持つ者もいる。ここあたりには、製鉄集団があり、スサノヲは製鉄の神として信仰されていたのでは。

◎天皇家のことを語る古事記の中に、出雲の話が出てくるのは愉快だねえ。

◎日本の神様：自然信仰（アニミズム）：神道：山・木・岩・・・八百万の神というね。

三種の神器：鏡と勾玉と刀

- ◎年末、明日は川西にBBQを呼ばれている、年二回の墓にも行かねば、と指折り数えながら阪急嵐山駅からJR嵐山駅に向かって歩く。同道する方を探したがゼロ回答なので、ソロ登山である。
- ◎8:45 保津峡駅を出発。先日来、愛宕山の写真を見て、「雪だ 雪山だ」と思っていたが駅の外はまったく乾いている、山の上の方も白いものはない、「雪は てっぺんだけかも」と無人の改札口の横のベンチでスパッツを着けたが、これは結局無駄だった、上も雪も泥んこも無く、ズボンのままで歩ける登山だった。
- ◎久しぶりのツツジ尾根、みなさん、「あそこはしんどい きれいな道だ」とおっしゃるが、標高の低いなら尾根道、樹林帯の中なので景色も見えない、「オレは 好きじゃないね ゴメンね」である。
- ◎8:50 荒神峠（昔は茶店もあったとか）にやって来た。駅でダウンの上着を脱ぎ、途中でジャンパーも脱いだ、日陰のここは寒くジャンパーを着ておにぎりをひとつ喰った。ツツジ尾根は誰とも会わなかった。
- ◎カワハギを見た、小さい傷跡ながらまだ生々しく樹液が垂れている。熊君がいるんだね、冬眠していないのかね。上の方で、熊を見たというチラシがいくつか出ていた。熊のカワハギは何度か見たが、それらは根元から上の方まで大きく剥いていたが、今日のは小さい、子熊かな。
- ◎エンヤコラ登って愛宕神社参道に合流した、想像なら、ここらあたりから雪のはずだが全くない、人も少ない、今日は淋しい愛宕山なのかな。愛宕山は正月、善男善女がわんさか押しかける山だと聞いていたが、年末の今は皆さん家事に忙しいのかもしれない。
- ◎山田さんが、「道の修繕 土木仕事 木を伐って 運んで 埋め込んで・・・」と言っていた。登山道の修繕はいくつかの山で見かけるが、ありがたく、恐れ入る仕事である。丁寧に石を積み、木を埋め込み、鉄の杭を番線で縛り、ロープを付けてくれている。皆さん手弁当で頭が下がる。
- ◎10:45 に水尾の別れに着いた。東屋と階段に何人か座っておられたので、ちょっと上で腰を下ろし、温かい茶を飲んで、パンを一個齧った。いつとき陽が照っていたが、曇りだし冷気が汗をかいた身体にひやりと冷たい。愛宕山はもう何十回と登っているが、いまあらためて、「この山は つまらない 面白くない」と思いたした。参道は階段ばかりでつまらないのか、山全体が樹々に覆われ景色が悪いのか、神社ということでオレにとって邪鬼があるのか・・・思いめぐらすがわからない。ひょっとして今日の天気が薄暗いのでそう思うだけなのかもしれない。
- ◎11:30 いつも昼食を喰う場所にやって来た。ちょっと早い昼飯にしようと腰を下ろした。“デカ盛りラーメン”という奴を買ってあったので持ってきた。湯が500CCも要ると書いてあって大きいテルモスの湯を全部入れた。一口喰って、「まずい」と思ったが、残すわけにもいかないので汁も全部飲み、麺も何回も口に入れた。「まずいねえ」である。冬はヌードルとおにぎりがいい、サッと食べられる、多少温まるというけれど、ヌードルはいつもまずいと思っている。これからは味噌汁かスープにしよう、多少高くても美味しいものにしようと思うが、いざ次の山の飯はどうなっているかな。手作り弁当が一番うまいね、ただ冬はゆっくり箸を動かして食べる余裕がないんだね。ピクニックのように敷物を広げ弁当を出し、おかずを分け合い、お茶を沸かし、なんていう昼飯が一番美味いんだがね。
- ◎いつも昼飯を喰う場所に、小さい机がいくつも置いてある、子どもの工作作品のように置いてある。上にはテグスをめぐらし紐が巻いてある。「あれれ 鳶対策か・・・」以前山田さんが、「ここで食べていて 何度もトビにやられた」と言っていた。オレはトビにやられたことがないのでわからないが、なにか美味しいものを喰っていると、音もなくやって来ておにぎりなりパンなりをかっさらって行くそうだ。
- ◎12:45 月輪寺から下ったところの休憩所で水を飲んだ。やっと温かい、帽子を脱ぎフードをはずし、冷たい水が美味しい。今日は1リットルしか持ってこなかったが、家に帰ってお茶を1リットルぐらいがぶがぶ飲んだ。山を歩くと喉が渇く、水のみだね、オレは。
- ◎2:45 に清滝バス停に着いたが、2時半に出たばかりで、次は3時半、阪急嵐山まで1時間歩いた。有名観光地の嵐山界限は白黒黄色の外国人だらけ、気弱そうな日本人が少し居ただけだった。